



第18図 鬼瓦背面の製作技法

### (3) 製作技法

以下では、借用した鬼瓦について、製作技法をみる。①背面の調整手法と②合子の使用に注目すると、鬼瓦15とそれ以外では、製作技法に大きな違いが認められる(第18図)。

背面の調整では、鬼瓦15にのみケズリがみられる。また、鬼瓦15の背面にみる把手は、突出しておらず上面が平坦面を呈しており、厚さ5.8cm前後の粘土板を削り出して、橋状把手や側張りを成形したと考えられる(第15図写真右)。小林章男氏は紀年銘をもつ鬼瓦を分析し、こうした技法の使用時期を、14世紀から16世紀と位置づけている〔小林1999〕。一方、鬼瓦15以外の鬼瓦では、背面にケズリ調整はみられず、台部となる粘土板に板状の粘土を貼り付けて、側張りや補立てを成形したと考えられる(第11～14・16図右)。小林氏によって、16世紀以降に出現した技法と位置づけられている〔小林1999〕。

次に鬼瓦15は、顔上半部の内面に合子状の痕跡がみられ、型に粘土を貼り付けて、顔部を成形したと考えられる。一方、鬼瓦15以外の鬼瓦には、合子状の痕跡はみられず、型を用いずに顔部を成形したと考えられる。

以上、背面調整や顔部の成形をみていくと、鬼瓦15とそれ以外の鬼瓦に、時期差を想定することができる。また顔部の造型をみても、鬼瓦15は他の鬼瓦に比べて平面的で、両者の時期差を傍証できる。(河森)

### (4) 小結

前述のように鬼瓦15は、古い様相を呈する。これとセットとなる鬼瓦16(写真7-5)にも、同様の特徴が認められ、前身建物の古瓦を再利用した可能性がある。また、時期的な前後関係は不明であるが、鬼瓦4(写真7-4)も角が直線的に長く伸びる特徴をもち、これら以外の15点の鬼瓦との間に時期差が想定される。いずれも庫裏の屋根に接して外からは殆ど見えない位置に葺かれている。

上記3点を除く鬼瓦15点は、製作技法や顔部の表現が類似する。このうち11点の鬼瓦に「今里村瓦師平七」銘がみられ、同じ工人によって製作されたと考えられる。製作年代を確定する根拠を欠くが、蓮光寺本堂の建築年代は、棟木により享和三年(1803)と判明しており、これにちかひ年代が想定される。

なお鬼瓦1は、左側を欠損しコンクリートで補修されている。地元の方の話によると「十数年前に80才くらいで亡くなったお爺さんが、若い頃、屋根に登ったことがある」とのことで、大正期頃に瓦の修理が実施されたようである。鬼瓦1は、この時に補修されたものと考えられる。(清水)

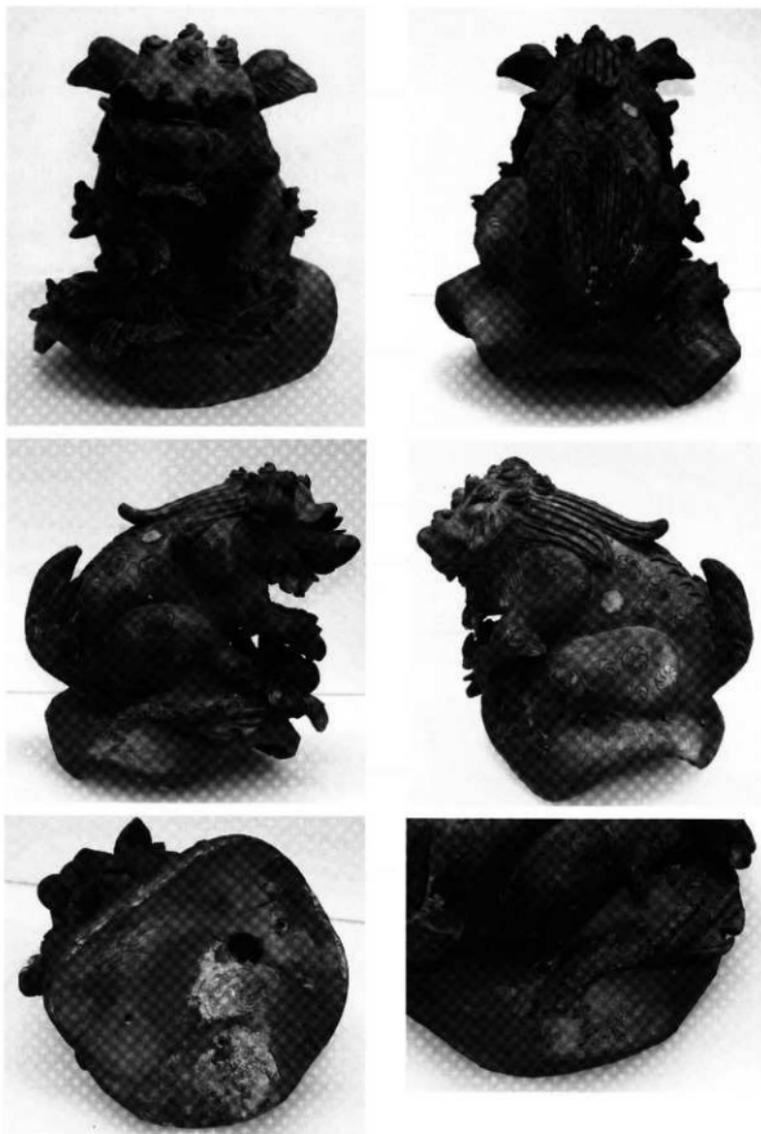


写真6 飾瓦19 (阿形の獅子) 写真



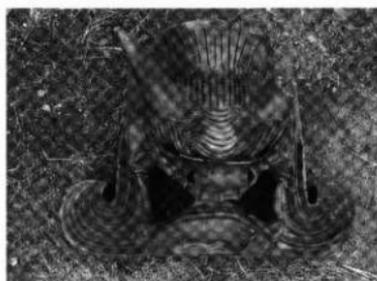
1. 鬼瓦1 (阿形の大棟鬼)



2. 鬼瓦2 (叶形の大棟鬼瓦)



3. 鬼瓦3 (阿形の降棟鬼)



4. 鬼瓦4 (製作手法の異なる降棟鬼)



5. 鬼瓦16 (阿形の古相を呈す妻降鬼)



6. 飾瓦20 (叶形の獅子)

写真7 鬼瓦・飾瓦写真

## 4. 埋蔵文化財発掘調査（法貴寺遺跡第6次発掘調査）

## (1) はじめに

法貴寺遺跡は、1985～86年の初瀬川の付け替え工事に伴う発掘調査によりその内容が明らかとなった。奈良県立橿原考古学研究所による第1次調査では、室町時代の環濠をもつ屋敷跡の全容がほぼ明らかとなり、中世の在地勢力の実態を知る手がかりが得られた。その後も田原本町教育委員会が開発に伴って第2～5次調査を実施しており、中世～近世の集落関連の遺構を多数検出している。

今回の蓮光寺本堂の建て替えに伴う発掘調査は、法貴寺遺跡としては第6次調査となる。建物解体後に全て人力により調査を実施した。廃土処理が困難であったため、東半南側・西半北側の全体の2/4について発掘調査をおこない、残り部分は工事立会で対応した。

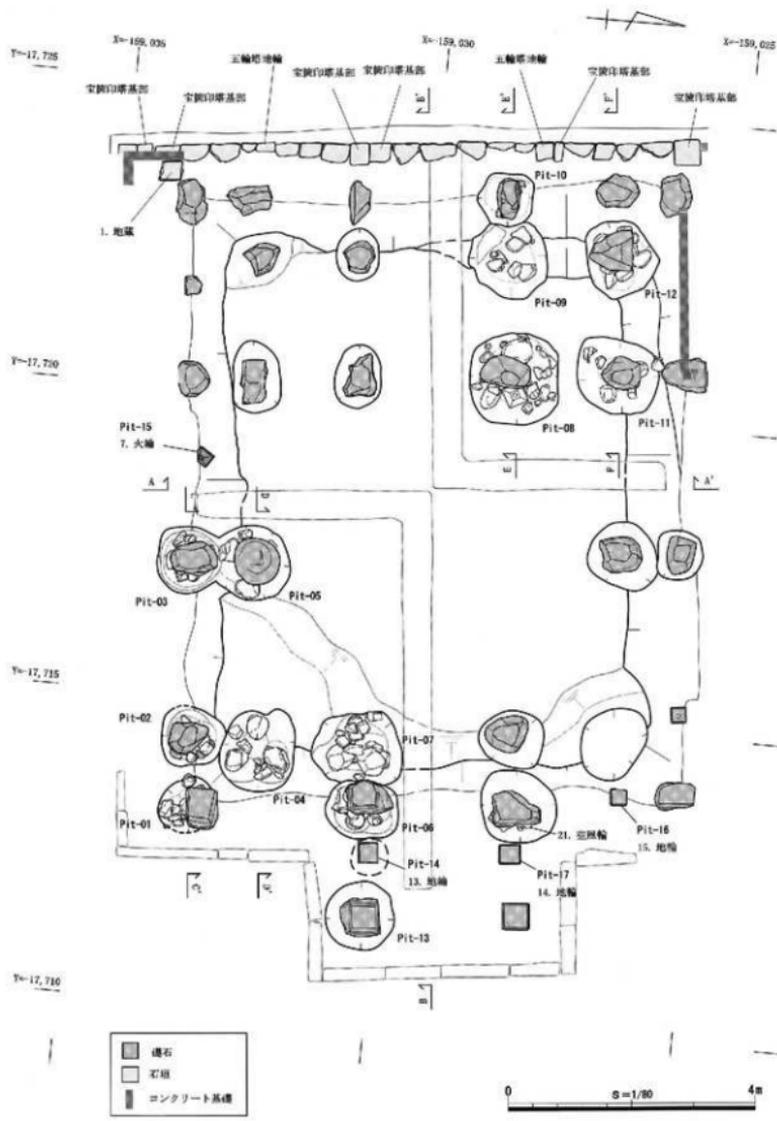
## (2) 層序

本寺院は約1mの盛土上に立地する。砂と粘土による版築土からは瓦器や瓦質土器等が出土しているが、第Ⅵ層には染付茶碗等の近世陶磁器片も含まれていることから、18世紀後半以降に形成された版築土であろう。盛土と亀腹には明確な時期差はみられず、同時期に構築したものと考えられる。第Ⅱ層まで構築したのち、柱穴を掘って礎石を据え、第Ⅰ層を薄く貼り付けて仕上げる。

第Ⅰ層	褐色土（やや粘質）	〔厚さ約10cm：上面標高約52.3m〕	近世亀腹
第Ⅱ層	淡褐色砂礫土	〔厚さ約10cm：上面標高約52.2m〕	◇ ・ 柱穴検出面
第Ⅲ層	褐色粘質土	〔厚さ約10cm：上面標高約51.1m〕	◇
第Ⅳ層	黄灰色粗砂（褐色土ブロック）	〔厚さ約10cm：上面標高約52.0m〕	近世の境内盛土層
第Ⅴ層	茶灰色粘質土	〔厚さ約10cm：上面標高約51.9m〕	◇
第Ⅵ層	黄褐色粗砂	〔厚さ約10cm：上面標高約51.7m〕	◇
第Ⅶ層	青褐色上・褐色土（ブロック上）	〔厚さ10cm以上：上面標高約51.6m〕	◇

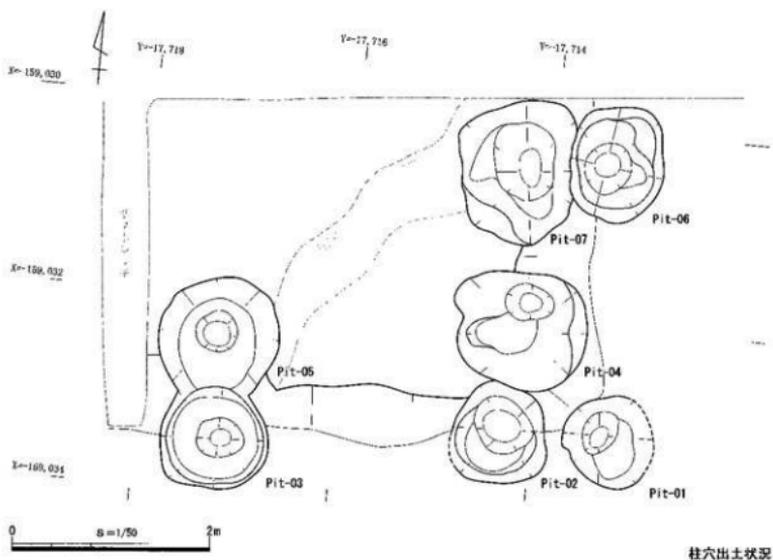
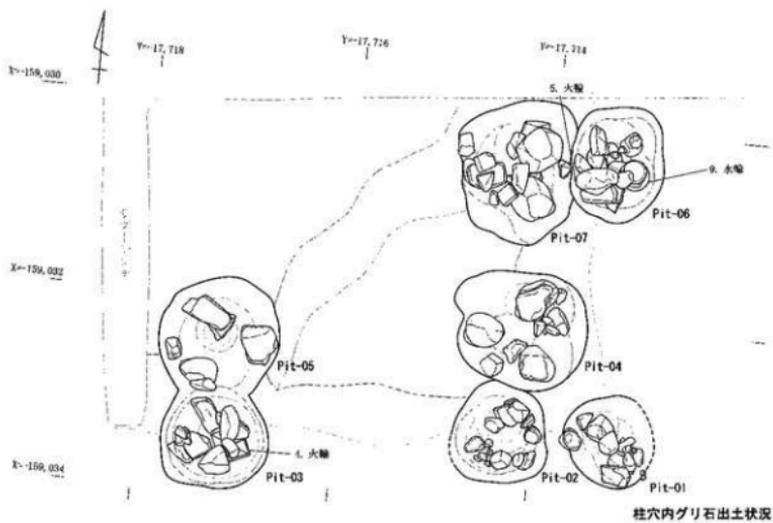
## (3) 検出した遺構

S B-01 棟札から享和三年に再建されたことが判明している建物（第19図）である。亀腹は境内地の造成と一連の版築によって形成されており、粗砂と粘質土の互層で盛り上げられている。回廊外側の礎石列より内側から立ちあがり、回廊内側の礎石列付近で約30cmの高さをもつ。漆喰は伴わない。亀腹を構築したのち、柱穴を掘って礎石を据え、粘質土を薄く貼り付けて仕上げる。主柱穴は径約1～1.5m、深さ0.4mのものが中心となる。柱穴内には10～40cmの自然礫や五輪塔・割石などを充填し、礎石を置く。なお、回廊の内側と外側の礎石規模に明確な差異がみられないことは前述のとおりであるが、これを据えるための柱穴規模及び割石の充填状況にも大きな差異はない。一方、向洋部分の柱穴は径10cm前後の礫で充填しており、主柱穴と手法の違いがみられる。また、正面の階段を支える礎石は五輪塔地輪を利用しているが、埋め戻し土は粘土質の土である。五輪塔地輪は回廊外側の間柱にも使用されていた。いずれも後補か。

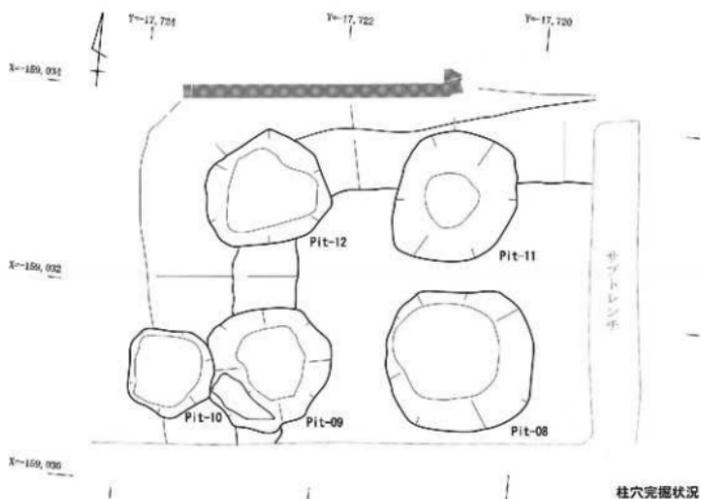
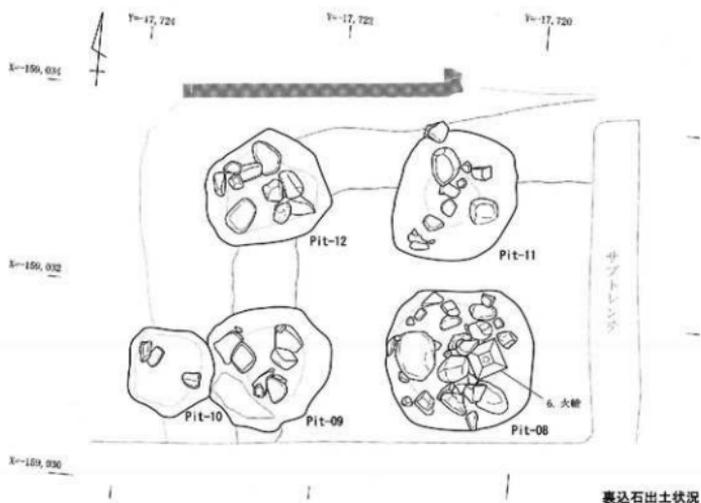


第19図 調査区遺構平面図





第21図 本歌東南区 遺構平面図



0 1/30 2m

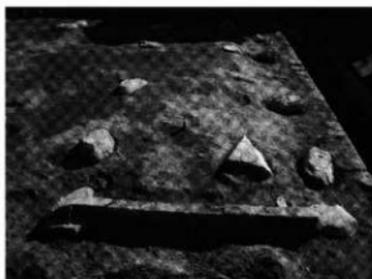
第22図 本堂北西区 遺構平面図



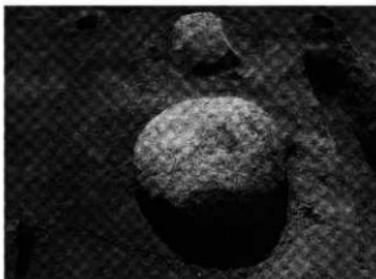
1. 本堂解体直後の状況 (東より)



2. 本堂東端の礎石列 (南より)



3. 本堂西端の礎石列 (北より)



4. Pit-03・05の検出状況 (北より)

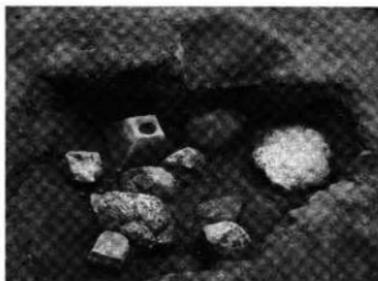


5. Pit-03の裏込め石 (南より)



6. Pit-06の裏込め石 (南より)

写真8 発掘調査写真(1)



1. Pit-08の裏込め石（北より）



2. 北西部の裏込め石検出状況（東より）



3. 南東部完掘状況（東より）



4. 北西部完掘状況（東より）

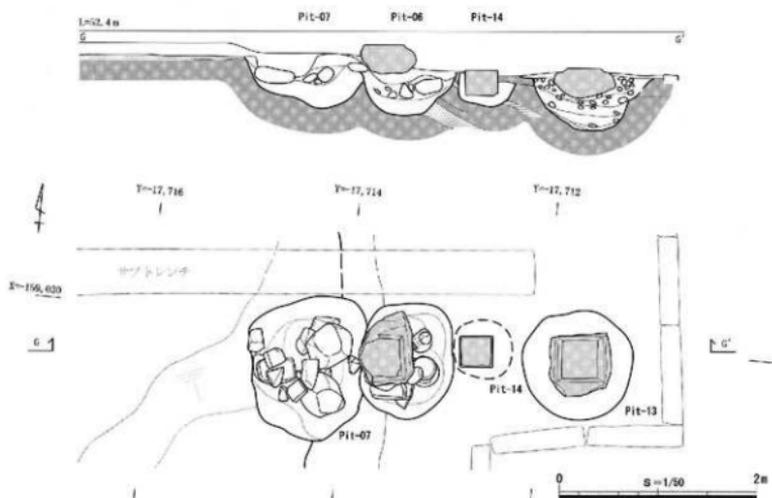


5. 中央たちわり東半の版築（南東より）



6. 調査風景

写真9 発掘調査写真(2)



第23図 向拝柱穴面図及び断面図

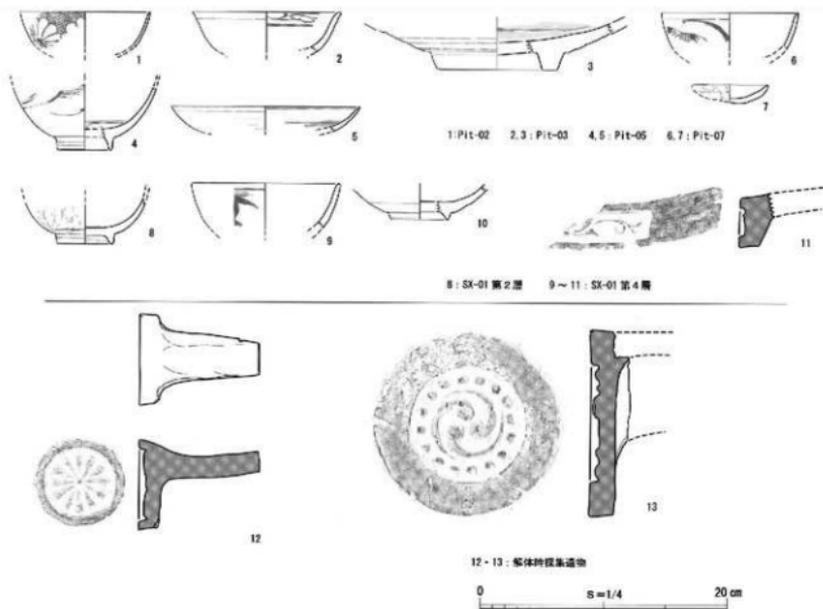


1. Pit-13層序 (南より)



2. Pit-14礎石設置状況 (南より)

写真10 発掘調査写真(3)



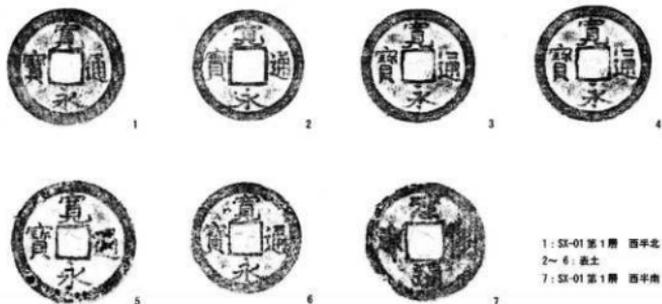
第24図 法光寺遺跡 第6次調査 出土遺物(1)

## (4) 出土した遺物

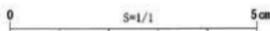
発掘調査により出土した遺物には、近世陶磁器・土師器・瓦・石造物・銭貨等がある。ここでは、蓮光寺の造営年代を判断する材料となる柱穴及び基壇版築層から出土した土器(第24図)及び内陣の床下を中心に散在していた寛永通宝7点(第25図)を図示する。なお、境内出土の石造物については、「蓮光寺・津島神社の石材と石種について」(本書161頁)で詳述する。

第24図-1はPit-02礎石裏込めの砂礫層から出土した染付茶碗である。2はPit-03礎石裏込めの砂礫層から出土した染付茶碗である。回転ナデによる凹凸が目立つ。3はPit-03礎石裏込めの砂礫層から出土した美濃瀬戸系とみられる陶器大皿である。残存範囲では外面に軸はみられない。内面はハケで白軸を施した上に緑軸を流し、さらに細く褐軸を施す。4はPit-05礎石裏込めの砂礫層から出土した染付茶碗である。高台端部に焼成時の砂が付着する。5はPit-05礎石裏込めの砂礫層から出土した染付小皿である。6はPit-07礎石裏込めの砂礫層から出土した染付茶碗である。7はPit-07礎石裏込めの砂礫層から出土した土師器小皿である。直径6cmの小型品である。

8は基壇(SX-01)造成土第Ⅱ層から出土した染付茶碗である。見込みには重ね焼きのためのケズリがみられる。また、高台内面に砂が多く付着する。9は基壇(SX-01)造成土第Ⅳ層から出土した染付茶碗である。10は基壇(SX-01)造成土第Ⅳ層から出土した陶器茶碗である。内外面ともに褐軸と白色軸がハケで施される。11は基壇(SX-01)造成土第Ⅳ層から出土した軒平瓦である。



1: SX-01第1層 西半北  
2~ 6: 表土  
7: SX-01第1層 西半南



	銭名	時代	直径 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	出土遺構	地区	備考
1	寛永通寶	江戸時代	2.41	0.11	2.87	SX-01 第1層	西半北	
2	寛永通寶	江戸時代	2.29	0.11	2.82	表土		
3	寛永通寶	江戸時代	2.30	0.10	2.67	表土		
4	寛永通寶	江戸時代	2.44	0.14	3.95	表土		
5	寛永通寶	江戸時代	2.55	0.16	3.37	表土		
6	寛永通寶	江戸時代	2.30	0.15	2.97	表土		
7	元豊通寶?	不確定	2.49	0.14	3.09	SX-01 第1層	西半南	文字浅く不鮮明

第25図 法貴寺遺跡 第6次調査 出土遺物(2)

19世紀初頭の建築である旧本堂に使用されていた軒平瓦とはタイプが異なる。これらの土器・瓦は、18世紀後半～末頃の遺物とみられる。

なお、12・13は本堂解体工事終了後に採集した軒丸瓦等である。本堂に使用されていたものである。12は大棟の側面に並ぶ菊丸瓦である。13は丸瓦である。本堂に使用されていた平均的な軒丸瓦として示した。なお、本堂軒平瓦は下方が膨らむ形のもが使われていた(写真2-6)。

第25図は、蓮光寺本堂床下の表土及び亀腹上層から出土した銭貨である。大半が内陣に相当する基壇西半から出土した。本尊への養銭が何らかの事情で床下に転落したものであろう。1～6は寛永通寶、7は文字が不鮮明であるが宋銭の「元豊通寶」とみられる。

#### (5) 小結

発掘調査の結果、本堂基壇の築造が18世紀末頃となることを確認した。版築に使用された粘土や砂に18世紀末頃の陶磁器が含まれていたことが根拠となる。従って、18世紀末頃から19世紀初頭にかけて、境内地の造成・柱穴の掘削・礎石の設置・建物の建築という一連の作業がおこなわれたのであろう。これは、本堂内陣・外陣の舟肘木や木鼻等の年代観とも齟齬がない。

ただし、棟札に「再建」と表現されているとおり、本建物が創建当初ということではない。内陣などの建築部材の一部には転用材が使われたことがホゾ穴等から推測され、さらに鬼瓦のうち庫裏

との間にあってほとんどみえない北側の妻障鬼2点が一段階古いものを再利用していることも確認された。本来別の場所にあった道場を現在の位置に「再建」した可能性は十分考えられる。

また、当寺院を建築する際には多数の五輪塔を転用していることが判明した。境内に傾かれた墓石転用材のうち1点には中世末の年号が記されており、付近の廃寺から石材を調達した可能性が高い。中世の法貴寺は十数字を数える大寺院であったとされるが、近世には著しく衰退して実相院と千万院の二院を残すのみとなる。このことから、近世に急速に勢力を拡張した真宗系道場の創建に際して、法貴寺配下の廃絶した堂宇から石材を調達した可能性が考えられる。奈良盆地中央の田原本町周辺には、建築などで使用できるような石材は産出されず、天理市五ヶ谷や吉野方面から運搬してくる必要があった。このため、建築の貴重な資材として無縁仏の墓石が有効利用されたのであろう。民家では使用を敬遠するような墓石であるが、蓮光寺では積極的に利用している。寺院であるからこそ、普通の石材同様に使用できたのかもしれない。近世の津島神社も実質的には神宮寺の感神院が採配していたことから、同様の事情で墓石の転用をおこなっていた可能性が考えられる。

向拝について、林清三郎氏は19世紀中頃から後半に後補された可能性を指摘している。発掘調査においても礎石工法の相違を確認したことから、その可能性が一段と高まった。

今回の建造物調査及び埋蔵文化財発掘調査により、近世後期における小規模な浄土系道場の詳細が明らかとなった。1つの具体事例として貴重なデータとなるであろう。今後のデータ蓄積にも期待したい。  
(清水)

〔謝辞〕 建造物や鬼瓦の調査等に当たっては、小林章男（文部科学省 選定保存技術保持者）、林清三郎（本町文化財保護審議会委員長）、中西秀和（奈良県文化財保護指導委員）の諸氏に多大なるご教示を賜った。また、蓮光寺 大山住職を初めとする檀家の皆様には文化財に対するご理解を賜るとともに、発掘調査にはボランティアとして参加して頂きました。ここに厚くお礼申し上げます。

## 註

- (1) 天理市木堂村の木工・森田善太郎の名は、奈良市正暦寺福寿院客殿（延宝九年（1681））、天理市蓮光寺本堂（寛永二年（1749））、天理市石上神宮神庫（嘉永四年（1851））等に記録が残る〔奈良県教育委員会2003〕。
- (2) 享保年間の今里村の取り調べ帳に、瓦屋の記載はみられない。ただし、宝暦十二年（1762）銘をもつ興福寺南川堂の平瓦（中西秀和氏教示／西克晏氏所蔵）に、「瓦工 和州城下部 今里邑平七」の押印があり、この頃に創業した瓦師と考えられる。

中西氏の調査によると、今里の石田家分家（今里221番）で「瓦平」銘の瓦を製造していたことが判明した。三代にわたり瓦を製作していたが、昭和10年頃、戦時の徴兵により廃業した。南側の本家でも瓦を製作していたが、早くに廃業し大阪八尾へ転出したとのことである。「今里村瓦師平七」銘をもつ瓦は、鏡作坐天照御魂神社（八尾）、阿弥陀堂（阪手）でもみられ、江戸時代における町場の成長に伴って、瓦が供給されたと考えられる。

## 参考文献

- 小林章男 1999 「裏から覗いた鬼瓦」  
日本鬼師の会・山田脩二 1999 「鬼文化江戸東京物語展」  
奈良県教育委員会 2003 「近畿地方の近世社寺建築6 奈良」『近世社寺建築調査報告書集』第14巻



## 蓮光寺・津島神社の石材と石種について

田原本町教育委員会

清水 琢哉

奈良県立橿原考古学研究所 共同研究員

奥田 尚

### 1. はじめに

蓮光寺本堂の調査では、多数の五輪塔残欠が出土した。これら五輪塔の多くは礎石の裏込石として転用されていたものである。また、東柱や階段基部の礎石となっているものもみられた。このほか、過去に庫裏の改築をおこなった際にも五輪塔残欠が多数出土したようで、その多くは庭石として使用されていた。なお、今回は実測・石種同定に至っていないが、西側の石垣最上段にも宝篋印塔基部及び五輪塔地輪が使用されていた。

本稿では、蓮光寺の総合調査の一つとして実施した蓮光寺境内石造物調査の結果を報告する。なお、境内の石造物については文化財保存課に持ち帰り実測等をおこなった。礎石については現地にて石種同定をおこなっている。また、津島神社の石材の一部についても石種同定の結果が得られたので併せて報告する。

(清水)

### 2. 蓮光寺出土の石造物

蓮光寺境内の調査で判明した石造物は、全部で21点(第1・2図・第1表)になる。なお、発掘調査によって出土したものの位置については、「IV-4. 法貴寺蓮光寺の総合調査」第19図(150頁)を参照されたい。

1は境内南西端の石垣付近に伏せて置かれていた地藏(菩薩?)型立像である。方形で、下部に小さな突起をもつ。頭部以上の上半を欠損する。

2・3は境内の庭先に置かれていた五輪塔空風輪である。庫裏の建設時に採集されたものとみられる。表面の風化が進む。21(第3図・出土状況図のみ)は、礎石の裏込めに使用されていた空風輪である。奥田による同定終了後に出土したため石種はわからないが、赤みがかった花崗岩であり、19とはほぼ同質のものとみられる。風化はほとんどみられず、残存良好であった。

4～6は五輪塔の火輪で、いずれも礎石の裏込めに使用されていた。4・5は周縁部に大きな欠損がある。7は礎石に転用されていた五輪塔の火輪である。南側の縁柱を支えていたとみられる。全体に風化が進んでいる。8は本堂の解体作業時に出土した五輪塔の火輪で、床下の東柱を支えていた可能性がある。側面中央下端に紐掛け用とみられる掛りが三方向に設けられている。なお、いずれの火輪にも上面及び下面に円形のホゾ穴が設けられている。

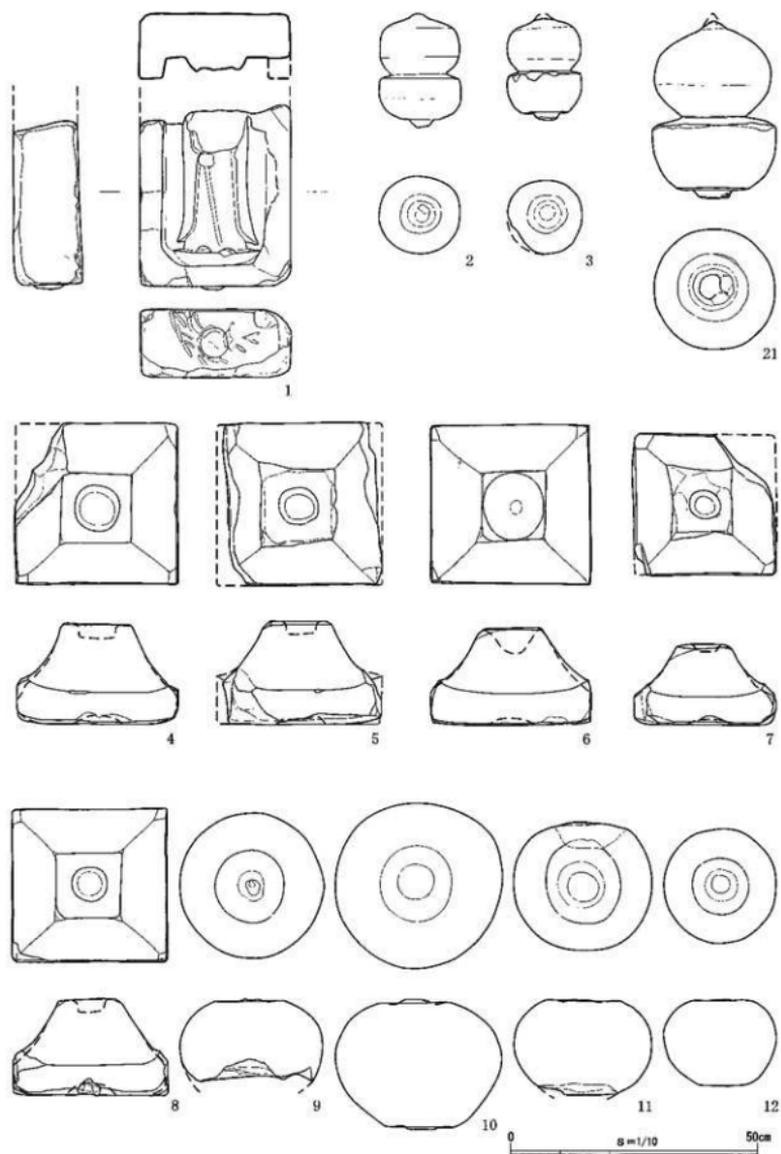
9は礎石裏込石として使用されていた五輪塔の水輪である。上面に突起が削り出されるが、先端は欠損している。また、下半に大きな欠損があり、裏込め石として使用する際に打ち欠いた可能性がある。10は本堂解体時に出土した水輪である。上面及び下面に小さく突起が削り出されている。

第1表 達光寺境内出土石造物 石種一覧表

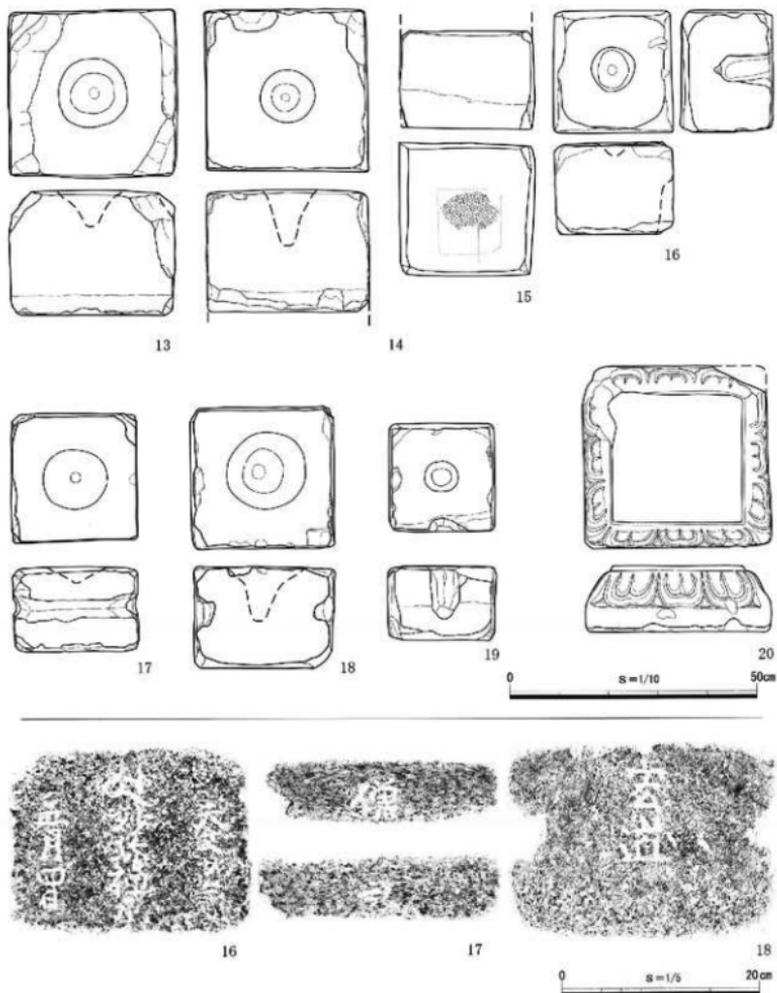
No	製品名	部位	重量	石種名	設置(出土)場所	備考
1	地藏石仏	-	27.00 kg	片麻状斑状析離石黒雲母花崗岩 (五ヶ谷付近)	敷地南西隅	
2	五輪塔	空風輪	8.90 kg	片麻状黒雲母花崗岩C	解体時	
3	五輪塔	空風輪	6.50 kg	黒雲母花崗岩C	解体時	
4	五輪塔	火輪	30.00 kg	柘榴石黒雲母花崗岩	Pit-03 裏込石	
5	五輪塔	火輪	23.25 kg	片麻状黒雲母花崗岩D	Pit-06 裏込石	
6	五輪塔	火輪	32.00 kg	片麻状黒雲母花崗岩D	Pit-08 裏込石	
7	五輪塔	火輪	12.50 kg	柘榴石黒雲母花崗岩B	Pit-15 礎石	
8	五輪塔	火輪	30.50 kg	片麻状黒雲母花崗岩D	解体時	
9	五輪塔	水輪	20.25 kg	斑状柘榴石黒雲母花崗岩	Pit-06	
10	五輪塔	水輪	39.75 kg	斑状柘榴石黒雲母花崗岩	解体時	
11	五輪塔	水輪	20.50 kg	片麻状柘榴石黒雲母花崗岩	庫裏建設時	
12	五輪塔	水輪	14.25 kg	柘榴石黒雲母花崗岩A	庫裏建設時	
13	五輪塔	地輪	70.50 kg	柘榴石黒雲母花崗岩B	Pit-14礎石(向拝柱南)	
14	五輪塔	地輪	65.00 kg	柘榴石黒雲母花崗岩B	Pit-17礎石(向拝柱北)	
15	五輪塔	地輪	36.00 kg	斑状柘榴石黒雲母花崗岩	Pit-16礎石	
16	五輪塔	地輪	26.50 kg	柘榴石黒雲母花崗岩A	礎石(庫裏建設時出土?)	「天文廿年・」
17	五輪塔	地輪	26.50 kg	柘榴石黒雲母花崗岩B	解体時	「僧 □」
18	五輪塔	地輪	38.00 kg	片麻状柘榴石黒雲母花崗岩	庫裏建設時	「宏道」
19	五輪塔	地輪	16.75 kg	柘榴石黒雲母花崗岩A	庫裏建設時	
20	宝篋印塔	台座	38.50 kg	柘榴石黒雲母花崗岩B	庫裏建設時	
21	五輪塔	空風輪	27.00 kg	未同定	礎石裏込石(2ヶ所)	

ほぼ完存する。11・12は庫裏建設時に出土した水輪である。11は上面に小さな突起が削り出される。また、下面を欠損する。12は上面及び下面に小さな突起が削り出されている。

13・14は階段下に設置されていた五輪塔地輪である。上面に円形のホゾ穴が設けられている。14のホゾ穴はやや深い。転用時には天地逆に設置されていた。15は東側回廊の束柱礎石として使用されていた方形の石である。ホゾ穴はみられないが、五輪塔地輪を転用した可能性がある。柱の乗る部分に整って表面を削った痕跡がある。また、地上に露出する上端から5cm程度の部分が台形状にカットされている。16～19は五輪塔地輪である。16は境内の礎石とされていたもので、庫裏建設時に出土した可能性がある。「天文廿年 □妙称禪尼 五月四日」(□は梵字)の除刻がみられる。上面には円形のホゾ穴がある。また、右側面には転用時とみられる溝状のホゾがある。17は解体時に出土したとみられる。上面に円形のホゾ穴がある。また、側面には転用時に彫られた組掛け用の溝がある。「僧 □」の銘文がみられるが、中央が溝が横断して1文字程度欠損する可能性がある。また、下の1文字も風化が激しいため判読が難しい。18は以前から境内に置かれていたという。「宏道」の銘文がある。側面角の中心に組掛け用の挟りが設けられている。上面中央のホゾ穴が深い。手水鉢のように使っていたということと関係するかもしれない。19は庫裏建設時に出土したとみられる。上面には円形のホゾ穴がある。また、側面1ヶ所には溝状のホゾがある。20は庫裏建設時に出土したとみられる宝篋印塔の台座である。4辺に複葉蓮弁3枚が彫られる。風化が激しい。(清水)



第1図 法貴寺遺跡第6次調査(蓮光寺)石造物実測図(1)



第2図 法貴寺遺跡第6次調査（蓮光寺）石造物実測図及び地輪拓本（2）

### 3. 蓮光寺の石造物等の石種について

蓮光寺に使われていた礎石と延べ石の石材の一部、散在する石造物の部材の一部を採眼で観察し、石種を同定した。また、石種の岩相をもとに石材の採石地を推定した。当寺院の東側には初瀬川があるが、礎石に使用できるような大きさの石材がみられないことから、蓮光寺にみられる石材は他地から運ばれてきたものである。近距離で同質の石材が産する地を石材の採石地とする。

蓮光寺にみられる石材の石種は、柘榴石黒雲母花崗岩A～B、斑状柘榴石黒雲母花崗岩、片麻状斑状柘榴石黒雲母花崗岩、片麻状柘榴石黒雲母花崗岩、片麻状黒雲母花崗岩A～D、黒雲母花崗岩A～Cである。石種の特徴（岩相）と推定される採石地について述べる。

柘榴石黒雲母花崗岩A：色は灰白色である。石英・長石・黒雲母・柘榴石が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が2～4mm、量が中である。長石は淡茶色、粒径が2～5mm、量が非常に多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が1～2mm、量がわずかである。柘榴石は濃赤色、粒径が1～3mm、量がわずかである。

このような岩相を示す石は天理市大道から奈良市中畑にかけての付近（五ヶ谷付近とする）に分布する黒雲母花崗岩の岩相の一部に似ている。

柘榴石黒雲母花崗岩B：色は灰白色である。石英・長石・黒雲母・柘榴石が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が2～4mm、量が中である。長石は灰白色と淡茶灰色のものがある。灰白色の長石は粒径が3～6mm、量が多い。淡茶灰色の長石は粒径が2～4mm、量が中である。黒雲母は黒色、板状で、粒径が1～2mm、量がごくわずかである。柘榴石は濃赤色、粒状で、粒径が1～2mm、量がごくわずかである。

このような岩相を示す石は五ヶ谷付近に分布する黒雲母花崗岩の岩相の一部に似ている。

斑状柘榴石黒雲母花崗岩：色は灰白色である。石英・長石・黒雲母・柘榴石が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が1.5～2mm、量が中である。長石は灰白色で、斑晶と基質をなすものがある。

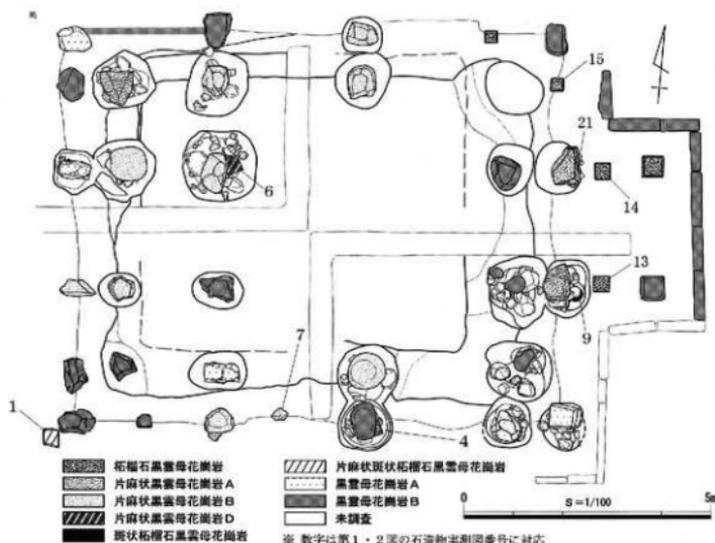
斑晶の長石は、粒径が6～10mm、量がごくわずかである。基質の長石は、粒径が2～4mm、量が非常に多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が1～1.5mm、量がわずかである。柘榴石は濃赤色、粒状で、粒径が0.5～1.5mm、量がわずかである。

このような岩相を示す石は五ヶ谷付近に分布する黒雲母花崗岩の岩相の一部に似ている。

片麻状斑状柘榴石黒雲母花崗岩：色は灰白色で、顕著な片麻状を示す。石英・長石・黒雲母・柘榴石が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が1～1.5mm、量がわずかである。長石は灰白色で、斑晶と基質をなすものがある。斑晶の長石は、粒径が6～8mm、量がごくごくわずかである。基質の長石は、粒径が1～3mm、量が非常に多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が0.5～1mm、量がわずかである。柘榴石は濃赤色、粒状で、粒径が0.5～1mm、量がごくごくわずかである。

このような岩相を示す石は五ヶ谷付近に分布する黒雲母花崗岩の岩相の一部に似ている。

片麻状柘榴石黒雲母花崗岩：色は灰白色で、顕著な片麻状を示す。石英・長石・黒雲母・柘榴石が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が2～4mm、量がわずかである。長石は灰白色と淡茶灰色のものがある。灰白色の長石は、粒径が2～5mm、量が中である。淡茶灰色の長石は、粒径が2～5mm、量が中である。黒雲母は黒色、板状で、粒径が1～2mm、量がわずかである。柘榴石は濃赤色、粒状で、粒径が1mm、量がごくごくわずかである。



第3図 蓮光寺石種の配置図

このような岩相を示す石は五ヶ谷付近に分布する黒雲母花崗岩の岩相の一部に似ている。

片麻状黒雲母花崗岩A：色は灰白色で、縞状を示す。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が1～2mm、量が中である。長石は灰白色、粒径が2～3mm、量が多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が1mm、量がわずかである。

このような岩相を示す石は天理市の龍王山付近に分布する黒雲母花崗岩の岩相の一部に似ている。採石地としては龍王山の西麓付近が推定される。

片麻状黒雲母花崗岩B：色は灰白色で、片麻状を示す。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が2～5mm、量が多い。長石は灰白色、淡褐色で、粒径が2～8mm、量が多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が1～5mm、量がわずかである。片麻状の方向に並ぶ。

このような岩相を示す石は天理市の龍王山付近に分布する黒雲母花崗岩の岩相の一部に似ている。採石地としては龍王山の西麓付近が推定される。

片麻状黒雲母花崗岩C：色は灰白色で、顕著な片麻状を示す。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が0.5～2mm、量が中である。長石は灰白色、粒径が1～2mm、量が非常に多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が0.5mm、量がごくわずかである。

このような岩相を示す石は五ヶ谷付近に分布する黒雲母花崗岩の岩相の一部に似ている。

片麻状黒雲母花崗岩D：色は灰白色で、顕著な片麻状を示す。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が2～4mm、量が中である。長石は灰白色と淡茶灰色を示すものがあ

第2表 蓮光寺の石材の石種使用傾向表

石種	礎石				延べ石	石造物の 部材	計
	加工石			自然石			
	造出あり	上面加工	石造物 転用				
柘榴石黒雲母花崗岩A（五ヶ谷付近）			2			3	5
柘榴石黒雲母花崗岩B（五ヶ谷付近）			3			3	6
黄状柘榴石黒雲母花崗岩（五ヶ谷付近）			1			2	3
片麻状産状柘榴石黒雲母花崗岩（五ヶ谷付近）						1	1
片麻状柘榴石黒雲母花崗岩（五ヶ谷付近）						2	2
片麻状黒雲母花崗岩A（竜王山付近）	2			1			3
片麻状黒雲母花崗岩B（竜王山付近）		8		2			10
片麻状黒雲母花崗岩C（五ヶ谷付近）						1	1
片麻状黒雲母花崗岩D（五ヶ谷付近）						3	3
黒雲母花崗岩A（竜王山付近）		4		1			5
黒雲母花崗岩B（初瀬谷付近）		7	1	3	7		18
黒雲母花崗岩C（五ヶ谷付近）						1	1
計	2	19	7	7	7	16	58

る。灰白色の長石は粒径が2～5mm、量が多い。淡茶灰色の長石は粒径が2～6mm、量が多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が1～1.5mm、量がごくわずかである。

このような岩相を示す石は五ヶ谷付近に分布する黒雲母花崗岩の岩相の一部に似ている。

黒雲母花崗岩A：色は灰白色である。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が2～3mm、量がわずかである。長石は灰白色、粒径が2～3mm、量が非常に多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が1～1.5mm、量がわずかである。

このような岩相を示す石は天理市の龍王山付近に分布する黒雲母花崗岩の岩相の一部に似ている。採石地としては龍王山の西麓付近が推定される。

黒雲母花崗岩B：色は暗灰色である。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が1.5～3mm、量が多い。長石は灰白色、粒径が1～3mm、量が中である。黒雲母は黒色、板状で、粒径が1～1.5mm、量が中である。

このような岩相を示す石は初瀬谷左岸付近に分布する黒雲母花崗岩の岩相の一部に似ている。採石地としては桜井市川雲から岩坂にかけての付近が推定される。

黒雲母花崗岩C：色は灰白色である。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が1.5～3mm、量が中である。長石は灰白色、粒径が2～5mm、量が非常に多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が2～3mm、量がごくごくわずかである。

このような岩相を示す石は五ヶ谷付近に分布する黒雲母花崗岩の岩相の一部に似ている。（奥田）

#### 4. 蓮光寺の石材の使用傾向

本堂の礎石に使用されている石材を五輪塔などの石造物の転用材、方形の造出をもつ礎石、自然石の上面を平坦に加工した礎石、割ったのみか自然石の礎石に区分し、石種との関係を見れば、石

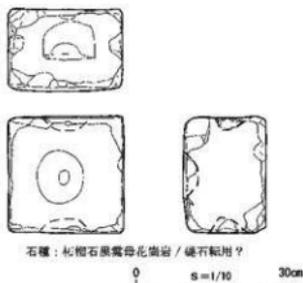
造物の転用材は五ヶ谷付近の石と推定される柗榴石黒雲母花崗岩A・B、斑状柗榴石黒雲母花崗岩で、造出をもつ石材は龍王山西麓付近の石と推定される片麻状黒雲母花崗岩Aである。龍王山西麓付近の石と推定される片麻状黒雲母花崗岩Bや黒雲母花崗岩Aは上面のみ加工されているが、初瀬谷付近と推定される黒雲母花崗岩Bは上面を加工された石材と本堂前に使われている延べ石にみられる。礎石石材の採石推定地は、大まかにみれば、五ヶ谷付近、龍王山西麓付近、初瀬谷付近となる。石造物の転用材を除けば、礎石の採石地は龍王山西麓付近と初瀬谷付近となる。

石造物を転用した礎石や他にみられる石造物の部材の石種には、柗榴石黒雲母花崗岩A・B、斑状柗榴石黒雲母花崗岩、片麻状斑状黒雲母花崗岩、片麻状柗榴石黒雲母花崗岩、片麻状黒雲母花崗岩C・D、黒雲母花崗岩Cがあり、岩相的にこれらの石種は全て五ヶ谷付近の石と推定される。川を隔てた東側にある文永九年（1272）の銘をもつ板碑の石材は柗榴石黒雲母花崗岩で、岩相的に五ヶ谷付近の石と推定される。多武峰の西門跡にある文永三年（1266）の銘がみられる石仏は石英閃緑岩で、寺川付近の石である。このことは五ヶ谷付近と寺川付近ではほぼ同時期に石造物を加工する工人がいたことを示している。しかし、法貴寺付近には五ヶ谷付近からの石材が多くみられ、寺川付近の石材がみられないことは、当時の石材流通の一つの現象を示しているといえよう。（奥田）

## 5. 津島神社拝殿出土の石造物

津島神社拝殿建て替えに伴って実施した寺内町遺跡第10次調査で石造物（第4図）が出土している。これは、18世紀後半頃の拝殿南側回廊束柱を支えていたとみられるPit-46の礎石である。五輪塔地輪を転用している。側面2ヶ所に持ち手の抉りがあり、側面角の中心には紐掛け用の抉りが設けられている。

（清水）



石種：柗榴石黒雲母花崗岩 / 礎石転用？

## 6. 津島神社出土の地輪の石種

第4図 寺内町遺跡第10次調査（津島神社）地輪

津島神社出土の地輪の石種は柗榴石黒雲母花崗岩である。石種と採石地について述べる。

柗榴石黒雲母花崗岩：色は灰白色である。石英・長石・黒雲母・柗榴石が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が2～4mm、量がわずかである。長石は灰白色、粒径が2～4mm、量が非常に多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が0.5～1mm量がごくわずかである。柗榴石は濃赤色、粒径が0.5～1mm、量がごくごくわずかである。

このような岩相を示す石は天理市大道から奈良市中畑にかけての付近（五ヶ谷とする）に分布する黒雲母花崗岩の岩相の一部に似ている。五ヶ谷付近の石材は鎌倉時代から江戸時代にかけて、奈良市から高取町、平群町、生駒市にかけての範囲の石造物にみられる。また、ごくわずかであるが、南河内の河南町や千早赤坂村の石造物にもみられる。津島神社出土の地輪も、当時、一般的に使用されていた石材の石造物といえよう。（奥田）

(資料紹介)

## 矢部団栗山古墳出土の須恵器

河森 一浩・藤田 三郎

### はじめに

唐古・鍵考古学ミュージアムでは、平成19年度 春季企画展として「太安万侶のふるさと ～多周辺の遺跡と文化財～」を開催し、田原本町立南小学校に保管されている矢部団栗山古墳の須恵器を展示した。この団栗山古墳は、日本では類例の少ない蛇行状鉄器が出土した古墳として著名である。にもかかわらず、その後、この古墳についての検討はほとんどなされていないのが実状である。ここでは古墳と須恵器の紹介、周辺遺跡との検討から、本墳の位置づけをおこなうこととする。

### 1. 団栗山古墳の概要

#### (1) 古墳の現状

団栗山古墳は、田原本町大字矢部小字藤ノ森373番に所在する。昭和11年(1936)5月<sup>1)</sup>、田原本から高田に通じる県道(矢部集落の南辺の東西道路)の敷設工事に際して採土地となり、工事中に不時発見となった古墳である。この古墳の発見とその後の経緯については、島本一氏の報告に詳しい〔島本1936〕。また、環頭柄頭や蛇行状鉄器など注目すべき遺物の出土があり、いち早く、梅原末治・末永雅雄両氏による紹介と報告がなされている〔末永1936・1941、梅原1936〕。

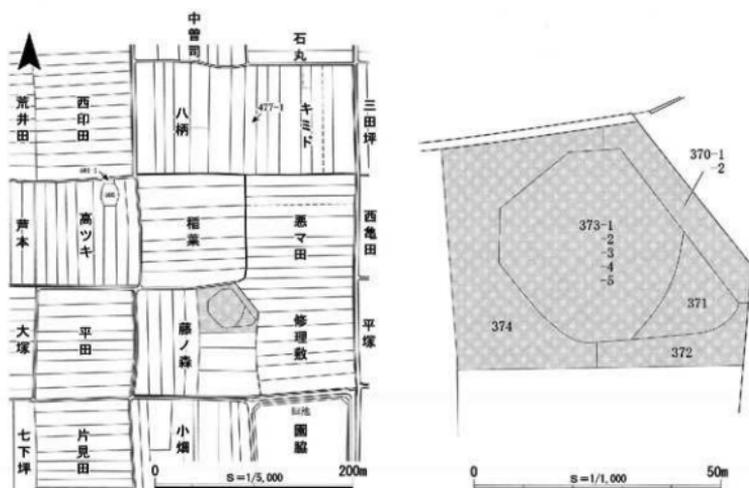
島本氏によれば、古墳は「南北の直径大凡百十尺」(約33m)、「高さは二間以上」(3.6m)のやや東西に長い円墳で、工事で「封土は六分位まで取り去られた」としている。この古墳の墳丘上には、



第1図 団栗山古墳の位置図



写真1 団栗山古墳遠景(西から)



第2図 団栗山古墳周辺の小字と地籍図

かつて榎木神社が祀られていたが、北方の矢部集落内の杵都岐神社境内に移築・合祀された<sup>2)</sup>。おそらく、墳丘上に祠があったため、中近世の耕地開発に伴う墳丘の削平は逃れたものと考えられる。その後、神社のあった区有地の373番は民有地となり、現在は畑地として果樹等が植栽され、平坦な高まりとして残存している（写真2-1～3）。

古墳と周辺の水田との比高差は、東側で約0.7m、西側で約1.2mを測り、西側の方が一段高く残っている。地籍図（第2図右）を見ると、373番のほぼ円形の畑地の南東側に三角形形状に突出する371番の一段低い畑地がある。仮にこの371番も墳丘の一部とみなすと、東南東-西北西方向の長軸は52m前後、直交する短軸は40m前後になる。また、これらを囲むように370番・372番の細長い水田と西側には逆「コ」字形の水田があり、これらの水田は、その周囲の水田より低い。これは、鳥本氏の報告では「此の古墳の周囲に二、三十年前には幅一間の堀を繞らしていた」ことの裏づけになるもので、氏はやや慎重であるが、状況からすれば古墳の周濠になる可能性は高いであろう。これら周濠の可能性がある水田を含めた全長は70m前後になり、後期の円墳としては考えにくい。このことから、本古墳は東南東方向に前方部を向けた墳丘全長50m余りの周濠を有する前方後円墳の可能性が高いであろう。

埋葬主体は、工事後の状況から鳥本氏が復元されている。「墳の中央」の「地上凡そ三、四尺の位置に恐らく木棺を使用して南北に安置」し、「前後二間の間に、北部に土器類、南部に金具類が配列」されていたとしている。これら遺物群の周囲では、付属施設等が見つかっていない状況からすれば、木棺直葬であろう。

## (2) 団栗山古墳周辺の古墳

島本氏によれば、団栗山古墳の北方100mの小字「キミド」<sup>3)</sup>、北西100mの小字「タカツキ」の一面に古墳の存在を指摘している〔島本1936〕。小字「キミド」の古墳は、直径三四尺（約10m）、高さ一尺（約0.3m）とするが、現在は水田と化しその位置を特定できない。地元の方からの聞き取りでは477番1の南端あたりにあったようである<sup>4)</sup>。小字「タカツキ」の古墳については、地籍図上でも明白で400番・401番にあたり、南北約23m・東西約17mの畑地として残存している（写真2-4）。この畑地が古墳かどうかは現在のところ判断できない。また、これらの周辺では発掘・試掘調査を数回おこなっているが、古墳関係の遺構は検出していない。しかしながら、団栗山古墳が単独墳とは考えにくく、周辺に点在する「大塚」「平塚」がつく小字名（第2図左）も関連づけるならば、古墳群を形成していた可能性は高いであろう。（藤田）



1. 団栗山古墳遠景（東から）



2. 団栗山古墳 墳丘東半の現状（北東から）



3. 団栗山古墳 墳丘西半の現状（北東から）

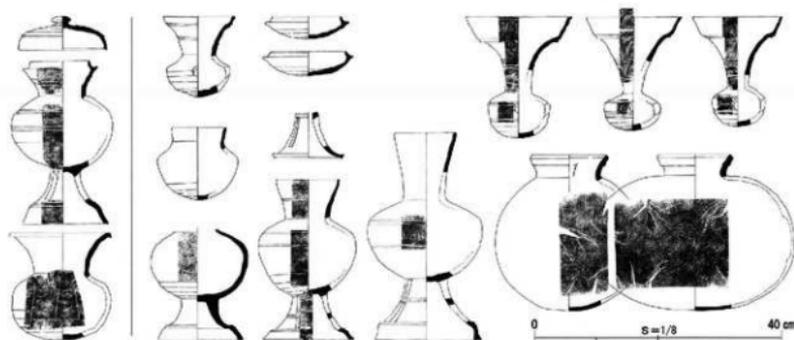


4. タカツキ古墳遠景（北東から）

写真2 団栗山古墳及びタカツキ古墳の現状

### (3) 出土遺物

出土遺物は大量である。東京国立博物館の遺物明細と島本・末永向氏の報告図面・記載内容を照合すると第1表になる。出土後、直ちに警察署に届出されたため、遺物は散逸しなかったものと思われる。この中で大きく異なるのは、島本氏報告の玉類である。これについては遺物を実見されていない模様であるから、工事直後に散逸したか、風聞だけの可能性がある。なお、須恵器の高坏には朱の痕跡が観察されていることから、島本氏報告にある「遺物を発見された局地附近は黒褐色の土層となり朱末が残在して居た」ことを裏づけるものである。(藤田)



第3図 昭和11年出土の須恵器(東京国立博物館編1994)

第1表 閉栗山古墳出土の遺物一覧表

遺物種		東京国立博物館所蔵になっている遺物明細 〔奈良県立考古博物館1975、東京国立博物館編1994〕	島本・末永氏報告記載で 左記より残れている遺物 〔島本1936、末永1941〕
土器	須恵器	高坏2・蓋1・高坏3・広口壺1・短頸壺1・長頸壺1・台付長頸壺5・有蓋台付長頸壺1・横瓶1・甕5 計21点/須恵器残片一括	
	土師器	長頸埴1/坏1・高坏片(島本氏報告の蓋・坏壁等・脚部の片、末永氏報告の皿のこたか)	
	馬具	銅鈴1・銅鈴残欠1・銅鈴残片3・帯鍔板残片1(末永氏報告の香蓋のこたか)・髹残欠1・辻金具1・辻金具残欠1・雲珠残欠1(島本氏報告の青銅製容器のこたか)・蛇行状鉄器1・鉄器片	鍔の頭(鉄器片等に含まれている可能性有)
	武器	環頭柄頭1・鉄錐(長鋸式約30餘)残片2括・銚石尖残片2(仮製)	銚身(鉄器片等に含まれている可能性有)
	その他	木片	玉類・朱末

※ゴツクは実測図があり特定できる遺物〔島本1936、末永1941、東京国立博物館編1994〕

## 2. 南小学校保管の須恵器

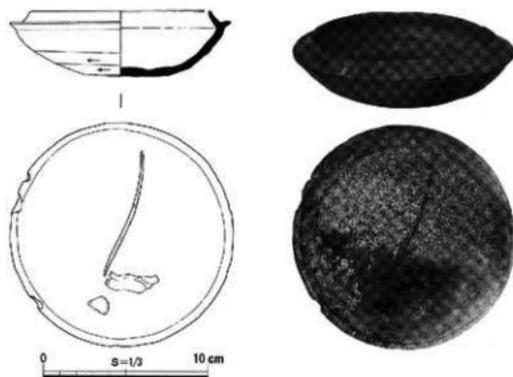
## (1) 須恵器の観察

「吉田榮太郎氏寄託」とされる資料（第4図）で、現在、田原本町立南小学校の校長室で保管されている。もと多小学校に寄託された資料であるが、昭和36年（1981）、千代小学校との統合による南小学校の新設により移管されたようである。寄託された吉田氏は、矢部在住の方でこの団栗山古墳の一角に土地を所有されていることから、この須恵器が団栗山古墳出土である可能性が高い。ただし、「昭和九年 矢部字團栗山ヨリ発掘」とあり、出土年が工事発見時の年代より2年前にあたり異なる<sup>9)</sup>。しかしながら、後述するように団栗山古墳から出土した他の須恵器と型式も同じであり、状況的には同古墳の資料と考えても良いものと思われる。

本資料は、口径10.9cm、器高4cmを測る須恵器の坏身である。口縁部は内傾きみに立ち上がり、端部は丸くおさめている。焼成は良好で、色調は暗灰色を呈する。外面には直径10.5cmの範囲にわたりヘラ削りが施され、ほぼ中央にはヘラ状工具による直線の記号がみられる。また、外面から内面の一部には、暗褐色を呈する鉄分が沈着し、外面には鉄製品の一部と考えられる鉄錆が付着する。

団栗山古墳出土の須恵器の明細については、第1表のとおりで21点出土している〔末永1936、横山1966、東京国立博物館編1994〕。このうち台付有蓋壺・横瓶・甕は、横山浩一氏によって取上げられ、「海北塚様式」と位置づけられた（横山1966）。中村編年のⅡ型式-第4段階（TK43）に相当し、今回紹介した坏身も同時期に位置づけられる。坏身に付着した鉄分や鉄錆も、団栗山古墳に副葬された鉄製品の一部である可能性が高い。

なお、団栗山古墳出土の須恵器には、Ⅱ型式-第2段階（TK10）に位置づけられる資料もみられる〔末永1936、東京国立博物館編1994〕。古墳の造営時期はやや遅り、Ⅱ型式-第4段階（TK43）に相当する一群は、追葬に伴う資料と考えられる。ただし主体部の様相は不明で、その評価は困難である。（河森）



第4図 南小学校保管の須恵器

### 3. 団栗山古墳周辺の遺跡動向

団栗山古墳周辺には、秦楽寺遺跡・多遺跡・秦庄遺跡・矢部遺跡・佐味遺跡といった古墳時代の集落が断続的に営まれている（第5図）。また、多遺跡第10次調査や矢部遺跡では、古墳時代前期から後期に位置づけられる方形区画墓が検出され、墓域の広がりや想定されている〔寺沢1986・87〕。多遺跡や矢部遺跡では、古墳時代前期にも遺跡の形成が認められるが、須恵器が出現する古墳時代中期以降の動向を整理すると、第2表ようになる。

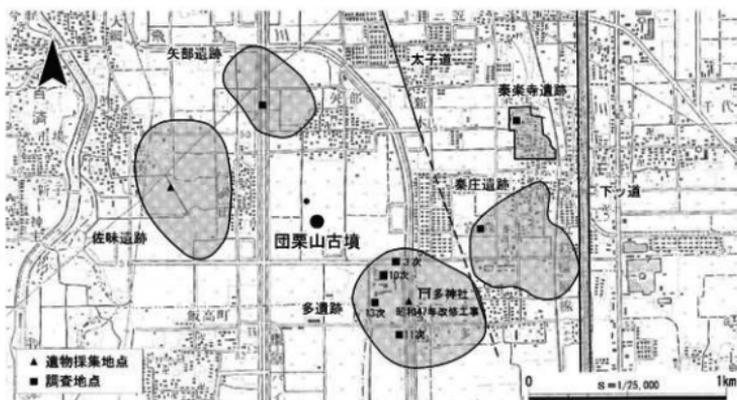
**秦楽寺遺跡** 第3次調査において碧玉製管玉や琥珀製玉、滑石製白玉等の各種未成品や剝片、砥石が検出され、玉類の製作遺跡であることが判明した。遺構については不明であるが、布留3式～中村福年のⅡ型式第2段階（TK10）にかけて土器が出土しており、古墳時代前期から中期を主体とする集落が営まれたと考えられている。

**多遺跡** 弥生時代中期には環濠集落が展開する。古墳時代以降にも集落の形成が認められ、居住地点を移動しながら、中期から後期の集落が断続的に継続する。その範囲は広く、大規模な集落と思われる。

**秦庄遺跡** 古墳時代中期後半から後期初頭に及ぶ溝・土坑が検出されている。

**矢部遺跡** 古墳時代前期から土坑・方形区画墓が検出され遺跡の形成が認められる。ただし、中期以降には土坑が消滅し、方形区画墓を主体とした墓域が断続的に営まれる。中村福年のⅠ型式-第3段階（TK208）からⅡ型式-第1段階（MT15）を主体とし、その後、方形区画墓の造営は一時的に停止する。

**佐味遺跡** 河川改修に伴い遺物が採集され、遺跡の実態は不明である。弥生時代中期や庄内式の段階にも遺跡の形成が知られ、古墳時代以降については、中村福年のⅡ型式-第3段階（TK43）からⅢ型式-第1段階（TK217）に位置づけられる。古墳時代後期から古代にかけて中心的な遺跡とみられる。



第5図 団栗山古墳周辺の古墳時代遺跡分布図

第2表 団栗山古墳と周辺の古墳時代遺跡の消長

型式		時期(須恵器)									文献・備考
		TK216	TK208	TK23	TK47	MT15	TK10	TK43	TK209	TK217	
団栗山古墳							築造?	追葬?			東京国立博物館編 1994
奈術寺遺跡		○	○	○	○	○					清水・奥谷2009
多遺跡	第10次	●	●			●	●	●	●		寺沢1989
	第11次		○	○							寺沢1988
	第3次			●	●						河上1979
	第6次					□	□?				廣川1984
	第13次						○				見瀬1996
秦庄遺跡			●	●	●	●					林部1992
矢部遺跡			■	■	■	■	■				寺沢1986
佐味遺跡								○	○	○	採集資料

※●集落 ■墓 ○包含層 □採集品

以上、周辺遺跡の動向をみると、秦庄遺跡や矢部遺跡では、集落や墓域が中村編年のⅡ型式-第1段階(MT15)にほぼ終焉する。また、多遺跡第10次調査地点では、Ⅱ型式-第1段階(MT15)から集落の形成がみられ、後期前半に二期が認められる。こうした点を踏まえると、団栗山古墳との関係において以下の3点が注目される。

1. 団栗山古墳の造営を、Ⅱ型式-第2段階(TK10)の段階と考えたと、その出現は周辺遺跡にみる二期と関連する可能性がある。
2. 古墳の主体を占めるⅡ型式-第4段階(TK43)は、矢部遺跡で墓域形成の空白期にあたっており、団栗山古墳の位置づけを考える上で注目される。
3. 団栗山古墳の被葬者の居住地として、多遺跡(第10次調査)の存在が注目される。(河森)

#### 4. まとめ

団栗山古墳は、盆地中央部にあって近年まで墳丘が残存していた数少ない古墳である。残念ながら、工事によって墳丘の大部分が消失してしまっただが、現状から推察するに周濠を有する全長70mクラスの前方後円墳になる可能性がある。また、出土須恵器の検討から6世紀前半に築造されたものと考えられるが、これまで十市郡北部地域では、当該期にこの規模の古墳は確認されておらず、盟主的な存在といえよう。

団栗山古墳の築造後にあたる古代には、当古墳の東南に延喜式神名帳に記載される式内社である「多坐弥志理部比古神社」が鎮座し、この一帯は古代氏族・多(太)氏の本拠地と考えられている。また、当古墳の北東には、渡来系氏族との関連が指摘される「秦庄」という地名が残っており、ここ

に所在する築楽寺遺跡では、古墳時代中後期に玉作りをおこなっていることが判明している。さらに、この地域を斜めに縦断するように「筋違道」が走行しており、古代の盆地中央部にあって、重要な位置を占めた地域といえる。

このような状況を踏まえると、特徴的で豊富な遺物を保有していた団栗山古墳の被葬者・集団をその後の時代と全く切り離して考えることはできないであろう。今後、団栗山古墳の被葬者像を考える上で周辺遺跡の状況をさらに把握し位置づけていく必要があろう。(河森・藤田)

〔謝辞〕 今回の資料紹介にあたり、大淀町教育委員会 松田度氏、矢部在住の植島五一・吉田敏子両氏に御教示いただいた。記して謝意を表したい。

## 注

- 1) 東京国立博物館の記録によれば、発見年月日は昭和11年(1936)5月30日である。その後、6月初旬に高木氏が現地確認をおこない、事後処置がおこなわれたようである。また、出土品は、昭和13年(1938)5月27日付けで東京国立博物館が奈良県より購入している〔高木1936、東京国立博物館編1994〕。
- 2) 高木氏の報告では、墳丘には「杵築神社」があったとしているが、田原本町史では大正4年(1915)3月に字藤ノ森の「榎木神社」を矢部集落内の杵都岐神社境内に合祀されたとしている。ただし、この合祀は、他にも八干神社や愛宕社も含まれており、この大正4年に3社が一度に合祀されたのか定かでない〔田原本町史編さん委員会1986〕。
- 3) 小字「キミド」は、「大和国奈良復原図」では「キド」となっているところで誤記と思われる。地元でも「キミド」であることを確認している〔奈良県立橿原考古学研究所編1980〕。
- 4) 矢部在住の植島五一氏のご教示による。昭和23年(1948)のアメリカ極東空軍による上空の航空写真では既に長地形の水田となっていることから、この段階で既に消滅していたと思われる。また、地籍図上で円形にちかい地割が存在しないことはやや問題の残る点である。
- 5) 出十年の違いが、単なる錯誤かどうか判断しがたいが、神社の移築が大正4年の可能性があり、その後、民有地になり開墾が進んだのであれば、道路敷設工事前に出土した可能性もある。

## 参考文献

- 高木 一 1936「大和磯城郡多村矢部の古墳」〔大和志〕第3巻第8号  
藤原末治 1936「大和穴部に於ける古墳の発掘」〔考古学雑誌〕第62巻第7号  
末永雅雄 1936「蛇行状鉄器」〔考古学雑誌〕第62巻第9号  
末永雅雄 1941「磯城郡多村大字矢部 團栗山古墳」〔奈良縣史蹟名勝天然紀念物調査會抄報〕第2輯  
横山浩一 1966「手工業生産の発展」〔世界考古学大系 第3巻 日本Ⅲ 古墳時代〕平凡社  
河上邦彦 1979「田原本町 多遺跡発掘調査概報」〔奈良県遺跡調査概報 1978年度〕  
奈良県立橿原考古学研究所編 1980「大和国奈良復原図」  
西川高功 1984「田原本町 多遺跡第6次発掘調査報告」〔奈良県遺跡調査概報 1983年度〕  
田原本町史編さん委員会編 1986「多地区の神社」〔田原本町史 本文編〕  
寺沢 薫 1986「矢部遺跡」奈良県史蹟名勝天然紀念物調査報告 第49冊  
寺沢 薫 1988「田原本町 多遺跡第11次発掘調査報告書」〔奈良県遺跡調査概報 1985年度〕

- 寺沢 薫 1989 「田原本町 多遺跡第10次発掘調査概報」〔奈良県遺跡調査概報 1986年度〕
- 林部 均 1992 「田原本町 奈庄遺跡発掘調査概報」〔奈良県遺跡調査概報 1991年度〕
- 東京国立博物館編 1994 「97 磯城郡田原本町矢部」〔東京国立博物館所蔵 須恵器集成 I (近畿編)〕
- 見須俊介 1996 「田原本町 多遺跡第13次発掘調査概報」〔奈良県遺跡調査概報 1995年度〕
- 東京国立博物館 1999 「日本の考古ガイドブック」
- 奥谷知門制 2009 「奈楽寺遺跡 第3次調査」〔田原本町文化財調査年報17 2007年度〕

**田原本町文化財調査年報17**

2007年度

平成21年 3月30日

編集発行 田原本町教育委員会  
印刷 株式会社 明新社

